関東学院学院史編纂委員会編
『関東学院一二五年史』

（学校法人関東学院　二〇〇九年）

鈴木勇一郎

本書は、学校法人関東学院が組織した学院史編纂委員会が、創立以来の歴史を叙述した「正史」ではあるが、多くの部分は今回新たに史料を調査・研究し、新たに書き下ろされたものではなく、一九八四年に刊行された『関東学院百年史』の記述に多くを拠っている。まず、本書の主要構成を掲げておく。

序　三つの源流
第一章 横浜バプテスト神学校　第一の源流
第二章 東京中学院　第二の源流
第三章 中学関東学院　第三の源流
第四章 財団法人関東学院
第五章 戦時下の関東学院
第六章 学校法人関東学院
第七章 関東学院大学
補章　関東学院女子短期大学
第八章 関東学院中学校高等学校
第九章 関東学院六浦中学校・高等学校
第十章 関東学院の小学校・幼稚園

冒頭で触れたように、本書は百年史のダイジェスト版という位置づけであり、章立てなど基本的な記述の枠組みは同書を踏襲している。

本書が同学院創立一二五周年記念事業の一環として企画されたのは、百年史が一〇〇〇頁を超える浩瀚なもので、物理的な形状や分量の関係から、なかなか通読するのは困難という問題があったようだ。

これに対し本書は三〇〇頁足らずとコンパクトにまとめられており、評者自身も旅行中に本書を携帯して通読し、関東学院の歴史を勉強することができた。そうした意味で本書の意図はひとまず成功しているといえよう。

しかし、本書は、創立記念式典の会場で記念品として配られるような、愛校心を全面に打ち出した「お国自慢」「思ひ出集」的な「記念誌」とも一線を画す内容となっている。

もちろんこれは、本書の基礎となった百年史が資料に基づいた研究的態度で編纂されているということが大きな要因なのだが、教職員向け研修テキストとしても使用できる、つまり広く外部に向けて発信する広報的な色彩よりは、内部向けの参考資料という性格が強いことも大きく影響しているのかもしれない。また、百年史刊行以

降の二十年以上の歴史は本書によって初めて扱われている部分であり、近年の動向は比較的詳細に扱われている。以下本書で気づいたことを思いつくままに挙げておく。

一つは創立年の問題である。関東学院は、横浜バプテスト神学校、東京中学院、東京学院、中学関東学院といういくつかの源流を持っているが、先の百年史でその創立年を変更した。本書でもその見解を踏襲しているが、従来中学関東学院の創立から数えていたことにはそれなりに意義があったはずであり、それを変更すると言うことはその学校の当初の性格付けをも大きく変える重大な問題である。これについてはもう少し明確な説明が正直なところほしい。もちろんその学校の創立をどの時点とするのかはきわめて難しい問題であり、また関東学院に限られるわけではなく、キリスト教学校だけに限っても、少なくない。今後この点はよく掘り下げて検討することを強く希望したい。

東京での教育事業に見切りをつけて、横浜に移転したということも、他のキリスト教学校にみることのできない特徴であろう。他教派は東京に集中しようという傾向を見せているからだ。実はこの問題は関東学院という一つの学校にとどまるものではなく、東京と横浜という二つの都市の関係性ということにもつながる問題であり、今後もさらに検討が必要であろう。

本書では、南北バプテストミッションと神学校合同や財政、神学部廃止など、極めて微妙な要素を含む問題も取り上げられているが、近年においても一貫教育、法人と大学との関係などキリスト教「学院」型学校の多くが共有する問題にも言及されている。

とりわけ、第六章では学校法人関東学院に一章が割かれている。これは本文中にも言及があるように、同学院における法人の位置づけの反映であるといえるが、そこでは寄附行為に始まり、就業規則や各学校長の選考、人事制度などきわめて微妙な問題をはらむ事項について一通りの説明がされており、今後のことを考えると興味深い。

しかし、さわりの部分だけで相互の関連性に乏しく、掘り下げが足りない。例えば神学部廃止問題は、大学におけるキリスト教の位置づけ、大学紛争、大学と理事会の関係性など、さまざまな要素から構成されていたことは、感じられるが、その有機的な関連性まではよくわからなかった。

編纂期間が短かったこともあってか、事実関係の誤りも散見する。特に十六ページ付近の文部省訓令十二号問題の年代を取り違えており、明治学院など、その他のキリスト教学校の動きとの整合性がとれなくなっている。

また叙述スタイルを統一したとしているが、特に高等学校以下の各校の叙述スタイルにはばらつきが多く、また歴史というより、現状の説明になっている部分も少なからず見受けられた。

本書を一読すると、率直に言って関東学院はなかなか困難な問題の多い学校という印象を受ける。しかし、さまざまな困難に直面しているのは他の多くの学校も同じである。そうした問題を直視することを避ける学校の多い中、本書からは少なくともそれに向き合おうとする姿勢が感じることができ、今後に期待を持ちたい。